

滝の仁作と呼ばれるのは、仁作の家から小径づ
たいに溪流へ下ると、滝があるからである。仁作
は普段は村議の多山健吾の雇われ袖夫だが、仕事
の閑なときには冬以外は滝つぼに潜って岩魚や
山女魚をとる。とった魚は自分でほとんど食す
ることなく橋のたもとの木戸ゆいの店へ持って
く。木戸ゆいの店は花ノ根随一のデパート、よろ
ず屋であった。一ぱい飲めもした。その肴にイワ
ナやヤマメも供される。

仁作は魚の代償に焼酎を飲んで帰った。

おけた。仁作はこの手づかみ漁法で一目おかれて
いる。大川向こうの畑ノ墾やカワラ木にも仁作の
名は知られていた。

お人好しの仁作は他人が滝へ来るのを嫌うこと
はなかったが、滝つぼへ一緒に潜っても仁作のま
ねは誰にもできなかった。見た者の話によると、
イワナやヤマメが自分から仁作の広げている
両掌の中へとびこんでくるようだという。並み

の人間にはモリをつかってもとれるたかが知れて
いるのだから、みんなが仁作にカブトを脱いでし

自分がとってきた魚を食うことはなかったから、
それがどれだけの値で売られていたのか知るよし
もなかった。ただ現金を請求すると幾らにもなら
ないのに、焼酎を飲むと三杯くらいは黙って飲
ませてくれるから、いつとはなしに焼酎を飲む
習慣になった。三杯飲んで帰るときに仁作は豊か
な気分だった。

イワナやヤマメを滝つぼでとるとき、仁作は何
の道具も用いなかった。手づかみにするのである。
魚を傷つけないからイケスの中で長く生かして
まう。そして、仁作には河童の血がまじっておる
などと超現実的な陰口をたたくのである。

仁作に河童の血がまじっているはずがないのは、
彼が猪狩りに勢子をつとめたときの姿を見た
者なら容易に肯定できよう。イノシシは妙に仁作
の追う方から飛び出してくるのであった。イノシ
シを追うカッパなど見た者があるであろうか。

桑田吉次の家は本家筋である。シモノナガレの
桑田正太の家は分家である。正太は吉次よりずつ
と年長で、財産などもはるかに多いのだが、親族

の集まりなどの席ではどうしても年下の吉次より

下座に就かなければならない習慣になっている。

吉次の父親が生きているうちは何の抵抗感もなか

ったのに、吉次が本家の当主になると、どうして

も引つかかってしまう。吉次の父の葬儀のときに、

そうなることに正太ははじめて気づいた。こんど

何か親戚が集まるときには自分ではなく自分の

子供を出席させて、不快な思いを味あわなくて済

ませようと考えているが、シヤクなことに上の

子供はみんな娘であり、下のは男ながらまだ

とみられていたのに、ナガレの有権者を説きまわ
って対立候補の小原恵吉を当選させてしまったの
は正太だとされている。

それほどにも正太は吉次に好感を抱いていない
のである。この事情を知らないのは吉次本人だけ
であるかもしれない。

他の村に比して、この花ノ根は昔から文化とか
学問には縁のうすい土地柄で、最近でこそ高校生
もぼつぼついるが、大学まで進学しているのはカ

ミノヒガシの犬井五郎助のむすこしかいない。

中学生でしかない。

吉次が死んだら、分家は分家で独立宣言を出そ

うと正太は思う。それまでは仕方がないとして「い

まに見ている」と、いわば手ぐすねひいているわ

けだ。年齢からいえば、当然正太の方が先にあの世

行きになる順番なのだが、どっこいそうは考え

ない。

「やつには何しろ大砲のタマがはいつているの
でありますから」

この前の村議会議員選挙のとき、花ノ根の中堅
を代表して吉次が立候補した。吉次の当選は確実

五郎助はヒガシに多い炭焼きの一人であるが、
小学校時代は優等で通した。花ノ根にも何人かい
るその頃の同級生は、口をそろえて五郎助が頭

のいい生徒だったことをみとめる。五郎助より

成績の悪かった同級生のほとんどが高等小学校

へ進学したのに、五郎助の父は五郎助を進ませな
かった。

頭がいいなんぞ、炭を焼くのに何の役に立つか、
というのであった。たしかにカマから立つ煙の色
を見つめて火を加減し、頃あいをみて火口を泥で

ぬ塗りがためるといった仕事の中には、高度な頭脳を要求される要素はどこにもなかった。

しかし、勉強したいという欲求は仕事に必要であるか不必要であるかという現実とは別の次元に属するものであろう。それをわきまえない五郎助の父は、火口の前でこっそり読書三昧にひたっている五郎助の頭を松の薪ざつぼうで撲つたのだ。炭焼きの家に生まれたわが身が不運だと思えといった。

五郎助は考えた。むすこの八郎には好きなかだけ学問にそれほどの価値があるのかどうか。これについては見解の分かれるところであろう。しかし、五郎助はそこまで思いわずらわなかった。これを五郎助のコンプレックスの一種と見ることもできなくはない。

五郎助の焼く炭はよかった。品評会に出せばたいてい優等賞を獲得した。それだけに五郎助の炭を指定してくる仲買人や問屋も少なくなき、それが五郎助のむすこの学資を援けた。

来年の三月になれば八郎も卒業だ。何もかもそ

べ勉強させてやろう。貧乏な人間には学問くらいが唯一の財産というものだ。

むすこを高校へ、さらに大学へ進ませるのは口でいうほど、また頭で考えるほどたやすいことではなかった。姉の方は早くから町のバーへ出て働いている。この勤めはずいぶんいやなこともあるらしかったが、五郎助は娘に我慢させた。むすこのためには家族全部が犠牲になる覚悟でいた。

花ノ根にひところ、五郎助が娘を売ったという噂が流れたのはこうした事情による。

一人なのかも知れない。

シモノカミに榎の茂太郎という不運な男がいる。五郎助を花ノ根はじまって以来の秀才とすれば、茂太郎は有史いらいのゴロツキである。そういわれている。

シモノカミのほぼ中央にある一本榎の下に家があるのでエノキという通称をいただいている

が、名前の茂太郎をまともに呼ぶものはいない。
シゲ、シゲでとおっている。

エノキのシゲはもともと馬車挽きだった。大川沿いの県道を材木を運んだり炭を積んだりして町へ往復していた昔から、どことなくヤクザっぽい男であったが、一度トラックの運転手数人を相手に大げんかをやらかして、それ以後まともな職業からはきれいさっぱり足を洗ってしまった。この男がどのような方法で生活し女房を養っているのかは、花ノ根村七不思議の一つに数え

は荷馬車が最も威勢がよかった。乗合馬車というものもあつたが、御者の気の荒さで荷馬車に敵するものではなかつた。その後バスが乗り入れるようになって、バスの運転手たちは馬車挽きたちに気を使っていたものである。

街道はまだまだ狭かつたし、大川の崖つぷちのところでバスと荷馬車がすれ違ふときなど、馬車挽きはムシの居どころが悪いと故意に馬車を狭いところで立ち往生させてしまうのである。もちろんバスは人命を預かっているから無理には通れな

られている。七不思議といっても七つあるわけではない。とても不可解なことのひとつということである。そういえば、滝の仁作のイワナつかみも七不思議の中に入れられる。

とにかく、シゲとトラック運転手たちのけんかは、花ノ根、カワラ木、畑ノ墾といったここ近郷を貫く街道筋が近代化する一つの転換期を代表する事件であつただけに、住人たちの記憶に生なましい。

トラックがはいるまで、県道を通る諸車の中でい。バスがそろそろと徐行して待避点までバックするか、馬車がぎりぎりまで山側に寄せて、バスの乗客に悲鳴をあげさせるすれ違いをするほかない。馬車がバックする速度は、バスがバックするよりずっと遅いものだ。

だから、バスの運転手は日ごろから馬車挽きたちに愛想よく手を上げて挨拶しておかねばならなし、女の車掌などはこぼれるようなほほえみを彼らに進呈しておかなければならなかつたのである。

トラックがはいるまでこの県道で馬車挽きたち
に怖い存在はなかった。十代から馬車挽きになっ
たシゲがこうした扱われ方の中で増長し、ヤク
ザっぽくなつたとすれば、これは前近代の同情す
べきいけにえというべきであろう。

さて、トラックの運転手というのも、元来あま
りしとやかな存在ではない。シゲたちとトラック
運転手たちはたちまち対抗しはじめた。トラック
がはいることによつて、自分たちの仕事が減つた
という経済的な原因もあるにはあったが、むしろ

シゲたちには自分たちを尊敬しようとしな
いものだ。
（以上7月9日放送分）